珠玉の市民文芸が結集

文芸にいつ奨励賞作品を紹介

市民の文芸作品の発表の場として、毎年「文芸にいつ」が発刊されています。昭和51年から始まり、今年で第23号。今年は随筆、短歌、俳句、川柳、詩、小説の各部門に172人、760作品が寄せられました。今号では各部門の奨励賞作品をご紹介します（敬称略）。

なお、受賞者の言葉は、「文芸にいつ」に掲載の「受賞者寸感」の一部を抜粋したものです。

文芸にいつ作品集「文芸にいつ第23号」（1000円）は、次の場所で頒布しています。
◇頒布場所＝図書館、本町二番館、市民会館、生涯学習課、次川地区公民館

詩

みちゆき

斎藤愛子（日宝町）

この度の作品は、よき仲間に恵まれたからこその受賞と感謝で一杯です。通知のあった日、誰もいない秋草の庭で、作品みちゆきを読みあげました。うれしさの声は不安を混ぜ合わせて広がっていきました。揺れる一日でした。

梅雨の山路は
水を吸い過ぎた樹木の静寂だけ
小さく歩く肩先に土色のトンボが…
追っても払っても離れようとしない一匹のトンボ
歌にも絵にも程遠い二つの命が
誰もいない梅雨の山路を登って行く
靴がドロドロになって
ドロドロが鎖になって
ここ過ぎて　何処へ
消え去るのは　いけませんか
みちゆき　命の会話

どえらい暑さの中　野に育つ葡萄が
数え切れないほどの房を垂れて
紫のトンネルをつくっている
一粒一粒の瑞々しさ　豊かさは
乾き切った土のどこから
分けてもらったのだろう

うす暗い葡萄のトンネルが
小さな風を立て舞い込んだ蝶を
白い十字架にして静まっている
ワインの香りが体を包む

へばりそうな夏　見つけた
草原の牧舎
傾きかけた夕日が
やわらかな頬をつかまえている

ここにいるのは
ほんとうの私　ちがう私
語りかけたいことが出ます

ニュースで流れた冷え込みは
夜のどの辺でガラス窓一面に
白い花火を揚げたのだろう
月も星もない如月の深夜
闇を切り抜くように
通り過ぎていった　命
息をのむ白いみちゆき
魔人ですか
天使ですか
足が震えています

みちゆき
死を近づけて
生に焦がれて

お買物、ご用命は市内で

本年は有難うございました
渡辺美容院
本町3 新津川寄りの下道通り
☎(22)0626
"定休日"
毎週火曜＆第1月曜
㊐第3日曜日
◇営業時間　9:00～18:00
◇9時前＆18時以降は予約制
ヘアーステーション
わたなべ駅前店
新津駅文華前☎(22)2611
FAX (25) 2515
(本店) 0120-230626

ほしの医院
内科・アレルギー科・呼吸器科・小児科
さつき野駅
めぐみの湯向かい
北上新田胴作804-1
☎22―6522
●診療時間：月～金
AM9：00～12：30
PM3：00～ 6：00
㊐AM9：00～13：00
●休診日：日・祝日

随筆

精一杯けづりけづってようやく五枚の枠にあてはめたとき、雪ばかりの旨味のない作品になってしまい淋しい思いを感じました。其の作品が賞を受けるなど夢のようなことでまだ信じられません。

母からの贈り物

斎藤みつ子（古津）

主人との国鉄生活の中で水原のわずか一年半は忘れがたい思い出を残した。

水原に居を移して間もなく、実家の母が「お前が水原に住んでくれて本当によかった。お願いがあるんだよ。」と話だした。母は六十才を過ぎた頃から心臓病を患い入退院を繰り返す無理の出来ない身となっていた。病む身のつれづれに、姪に勧められ新潟短歌の同人となり毎月投稿を続けていた。勿論初心者の母の短歌はけっして勝れたものとは思えなかった。そして、しばらくすると拙ければ拙いなりに反響やアドバイスなどを期待していたようであった。母の作品に対しては長いあいだ一切何もなかった。それがあるとき、「ある無欠詠者の歌」と題して、最初からの約五年間にわたって克明に抜粋、母の病状を追うに、筆者も又その都度一喜一憂してこられたという優しい眼差しで評された一文が、貴重な一ページをさいて掲載されたのであった。

「銀色に穂波の揺るる芒原明日も見に来んこの原の路」一見平凡なこの作品のうちに、さまざまな想いが隠されているという書き出しで始まる一文は身内の者にとって、まして本人はなおさらのこと、病者への励ましと労わりが伝わってきて涙の溢れるものであった。

「この方はお豆腐の歌が多いからお豆腐屋さんに間違いないよ。水原の田中さんとおっしゃる。お前探してはくれまいか。一言お礼が申しあげたい。」ということであった。早速町中のお豆腐屋さんを探し歩いたが田中さんという店はなかった。ペンネームであった。散々探した末に丸山豆腐店と看板の掲げられた家に辿り着いた。お豆腐や油揚の他に雑貨も並ぶ店の奥の方に作業場があるらしく、湯気の立ちこめる気配が感じられた。思わず「ごめんください」の声に力がこもる。ご夫人と覚しき方に揚げたての油揚を求め、おずおずと尋ねる。「こちらに短歌の田中先生はおいでですか。」ご夫人は「はあ」と答え奥へ向って「父ちゃんお客さんだよ。」と呼ばれる。「おー」と返事があり間もなく声の主はゴムの前掛けゴムの長靴のいでたちで出来たてのお豆腐の大きな箱を抱えて出て来られた。一見して穏やからしいお人柄にほっとする。「私、先頃駅へ参りました斉藤の家内でございます。先回の短歌誌上でご丁寧なご批評を頂きました小川の娘でございます。母がお礼が申し上げたいと申しておりますのでお尋ねいたしました。」と一気に話した。「おーそれはそれは、まあこんな所ですがお掛けください。」と隅のテーブルへ誘われた。「イヤー奇遇ですね小川さんの娘さんですか。」「母はあの一ページが本当に嬉しかったのです。生活の中に新しい光が差し込んだような喜びでした。短歌を続ける勇気が湧いたと申しました。」「ご病気お悪いようですね。」「もう無理が出来なくなりました。歌を作ることだけが生きがいでございます。」お茶を頂きながらお話をかわしていると田中さんの嗄かなお人柄がじんじん伝わり私は涙ぐんでしまった。「どうぞ母に逢ってあげて下さい。体調のいい折りに宜舎へ連れて参りますから。」「喜んでお伺いします。」と即刻応じられ私は天にも登る思いで母に知らせた。

月の美しい夜母は宜舎で田中さんと夕食を共にする機会を持つことができた。田中さんはどんなに拙い作品に対してもあなどることなく心のこもったご批評をなさり、病む母に希望の灯をともして下さるのだった。「私はしがない豆腐屋でしかありません。何の学があるわけでなし、只歌が好きなだけです。」と只管謙遜され、私にも是非と歌作をすすめられるのだった。

それから半年後母は鬼籍の人となった。

「お前のおかげで私はいい人に巡り合え楽しかった。あんなに幸せなことはなかった。有難う。そしてお前も是非歌を作りなさい。心の慰めになるから。」と遺言のように何回も言った。田中さんはその後も母に幾度も励ましにお便りをくださりお見舞いにも来てくださった。母の死に直面して私は初めて歌を作ろうと決心した。

（以下、略）

お買物、ご用命は市内で

動物の気持ちで診察します。
案内
●犬・猫・鳥・ウサギ・ハムスターなどの動物医療
●不妊治療
●人工授精
●猫・犬の問題行動治療
●犬のしつけ指導
●処方食・フード
●グルーミング・シャンプー
●ホテル
診療時間
月～金
AM9：00～12：00
PM3：00～ 6：30
（PM1：00～ 手術時間）
土曜日
AM9：00～12：00
PM1：30～ 3：00
日曜・祭日 休診
人と動物のふれあい広場
小島動物病院
←新津市内方面
五泉方面→
秋葉公園
小島動物病院
秋葉2丁目（秋葉公園入口）
TEL 24―2223